

# モフモフ幻想郷ex

アシスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

100匹を超えるすくすくが、  
青年の運命を大きく変えた！

そんな物語の後日談です。

# 目次

1.	俺氏、モフモフまみれ。	1
2.	俺氏、びっくり仰天。	10
3.	俺氏、お父さん気分。	19
4.	俺氏、扱いの差が激しい。	27
5.	俺氏、SNSを活用。	33
6.	稀神サグメは癒されたい。	41
7.	私、パルパル。	48
8.	俺氏、いろいろ言われる。	53
9.	俺氏、祝う。	62
10.	俺氏、顔に出る。	69
11.	俺氏、モフりたい。	75
12.	私、デートの準備。	83

13.	俺たち、デート。	89
14.	俺たち、恥ずか死。	101
15.	俺氏、実家を思う。	109
16.	俺氏、パンを買う。	119
17.	俺氏、なんとなくわかる。	131



# 1. 俺氏、モフモフまみれ。

幻想入りして、早一年。

「きゅー」「きゅー?」「きゅー!」

「きゅー!」「むきゅー」「きゅー」

「きゅきゅー!」「きゅーっ」

モフモフまみれになりました。

---

幻想入りして丸一年。

早いものである。

つまり、初めてすすくすく白沢と出会って一年経ったと言うことだ。何度も言うけど早い。すすくすくもそう思わないか？

「きゅー」

え、そんなことよりモフモフして？

よっしや任せろ。

「……………」

「どうしたろくろ首」

「いや。前から気になつてたけど、ナナスケはモフモフの言葉がわかるの?」

「わかるらしいぞ。そしてナナスケ、私の表情を見るがいい」

仕事をそつちのけですくすく白沢と戯れていたら、『ナナスケ仕事しろ』の表情をしたバイトのこころちゃんに注意された。

最近よく来てくれるおかげで、こころちゃんの表情の変化もわかってきた。ちなみに今のこころちゃんめっちゃめっちゃ怒ってる。こわいこわい。

つて、ばんきさんいらしてたんですね。  
はいパス。

「きゅー!」ポーン

「ずっと前からいたわよ……つてモフモフを投げよぶつ!？」

すすすすく白沢をばんきさんにパスしたつもりが、少し力加減を間違えてしまったか。ばんきさんの顔面に抱き着つようにすすすがぶつかってしまった。

でもすすすすくはモフモフだからね。  
そんなに痛くないはず。

「……あとで覚えとろよ」

「きゅー?」

「なんでもない」モフモフ

「きゅー！」

何か言われた気がしたけど、ばんきさんは気にすることなく顔にくつついたすすくすくを引きはがし、すすくと遊び始める。

やっぱりダメージはないようだ。

流石モフモフである。

「ナナスケさん。私にも同じように投げてもらえませんか？」

「きゅー？」

阿求さんはブレませんね。

---



最近は特に時間が過ぎるのが早く感じる。  
あつという間に閉店時刻である。

「きゅー」「きゅー」「きゅーっ」

後片付けや掃除はすすすくたちが手伝ってくれるおかげで早く終わる。その分、ご飯の準備に時間がかかるわけだが。

しかし、今日の晩ごはんはカレー。予め作っておいたのを温め直すだけだから、とても楽。すすすくたちの好物の1つでもある。

あ、ばんきさん。

そこのお皿取ってください。

「ん」

「きゅーー」

ありがとうございます。つて、すすすく布都が乗つとる。別の皿に移動させよう。

「きゅー……zzzz」

「ねえトオル」

食後のブレイクタイム中。胡座をかいた上で眠るすくすくを起こさないように優しくモフモフしていたら、隣でくつろいでいたばんきさんに名前を呼ばれた。

「どうかしましたか？」

「……昼はよくもやってくれたわね。えいっ」

「きゅー！」

俺の顔面にすくすくが激突。

モフモフだから痛くな……いや待って痛い。

ばんきさん、すくすく勇儀は反則ですって。角は痛い。

「えいえいっ」

「きゅーー!」「きゅーー!」

俺の意見に耳を貸すこともなく、今度はすすく萃香とすすく華扇をポーンと投げ  
てくるばんきさん。痛いっす。

こうなつたらこつちも反撃だ。すすくも軽く投げられる分には楽しそうだし、遠慮  
なくやらせてもらおう。

さあ、すすく合戦の始まりですよばんきさん。

我がモフモフをくらうがいい。

「……まけない。えいえいつ」

「きゅー!」「きゅー!」

互いに手を伸ばせば指先が触れ合うぐらいの近距離で、すすくをポンポンと投げ合  
う。意外と楽しい。それに角以外ならやはり痛くない。むしろ心地よい衝撃だ。

投げられて飛ぶのが楽しいのか、次は自分と言わんばかりに、他のすすくたちも群  
がってくる。

5分も投げ合っていると、身体中にすくすくが抱き着いた状態になった。何故かすくすくも「きゅーっ」って言いながら離れようとしないうし、まさにモフモフまみれ。

こんな日々に、幸せを感じる今日この頃。  
ばんきさんはどうですか？

「……………まあ、幸せかな」

うん。よかった。

後日。

「ナナスケさん！ 私もモフモフ合戦やりたいです！ さあやりましょう！ えい

「やーっ！」

『きゅー！』

そう言いながら、開店と同時に阿求さんがやってきた。

………一体どこで知ったのだろうか。

気になるところである。えいえいつ。

## 2. 俺氏、びっくり仰天。

ある日の営業中、喫茶店が揺れた。

『『ぎゅーっ!?!』』

「うおおおっ！ 何事!?!」

地震というよりは、大きなものが空から落ちてきたような衝撃。すくすくもお客さん  
もどよめくほどの大きさのだ。

そういう俺もかなりびっくり。

何事かと思つて喫茶店の外を確認してみると。

「ぎゅー」

喫茶店サイズほどのすくすくが、そこにいた。

いやデカっ。

---

「きゅー」

「……………なんか、すごい来たね」

「『びっくり仰天』の表情」

ホントにびっくり仰天だよ。

こんなサイズのすくすくがいるとは。

お客さんには非常に申し訳ないけれど、本日はもう閉店。目の前のモフモフをどうかしなれば。

「きゅーっ」

太い声で鳴きながら、喫茶店前に悠然と佇む黄土色の巨大すくすくを観察する俺とばんきさんとこころちゃん。

よく見ると、によろつとした髭が2本生えている。ナマズのすくすくだろうか？ でもなぜこんなにも大きいのか。

……つてあれ。さつきまで阿求さんも一緒に観察してたはずなのに、いなくなっている。

「阿求ならあっち」

「も、もふもふ——っ！」

「きゅー」

ばんきさんの指さす方向には、ハートマークを振り撒きながら巨大すくすくに抱き着く阿求さん。うん、いつも通り。



「きゅーっ!」「きゅー」「きゅー!」

「きゅー」「きゅー!」「きゅー」

他のすすすすくたちも当然の如く、巨大すすすすくに抱き着いたり登ったりしている。うん、いつも通り。

しかしどうしよう。保護しようにもこの大きさでは喫茶店に入らない。かと言って、ずっと外にいさせるのもなあ。最低限、雨風を凌げるようにしないと。

そうだ。こういう時こそ紫さんに相談してみよう。亀の甲より年の功ってね。

—— GSチャット ——

@シン・ナナスケ

>紫さん、相談したいことがあるのですが。

@シン・ナナスケ

> あれ？

@ シン・ナナスケ

> 紫さーん？

@ シン・ナナスケ

> ……………あつ。

@ シン・ナナスケ

> 紫さん。10歳前半にも関わらず

> 圧倒的な才能と知識と美貌を携える貴女の力を

> お借りしたいのですが。

@ ゆかりん(14)

> 何かしら？

@ シン・ナナスケ

> 巨大なすくすくが降ってきたのですが

> どう対処したら良いでしょうか？

@ゆかりん（14）

> 愛で受け止めてあげなさい

---

だめだ。紫さんの機嫌が悪い。

相談するのは諦めよう。

「いつそまた増築したら？ モフモフたちもやる気みたいだし」

「きゅー！」

ばんきさんはすくすく萃香とすくすく勇儀を抱えながらそんな案を出す。

うーん、増築するにも土地がないんだよなあ。

借りてる敷地はもう目一杯使っちゃってるし。

せめてもう少し小さければな何とかなるんだけど……。

「きゅー」クイクイ

お、すすすすく永琳。何か良い考えがある？

ズボンのすそを引っ張るすすく永琳の左手には、不思議な色のカプセルが握られていた。

なるほど。小さくなる薬か。

流石月の頭脳のモフモフ。早速試してみよう。

『きゅー！』『きゅー』『きゅー！』

「モフモフ……モフ……モフう……これが……幸せっ……！」

飲ませる前に、すすくと阿求さんに巨大すすくから降りてもらわないと。というか阿求さん、いつの間に頭の方まで登ったんですか。

「ぎゅー！」

「ほう……これはまた『良いモフ』ですね。ぎゅーっ……むふう……」

すすくすくナマズに溺れる妖怪が一人。

モフモフソムリエ、さとりさんである。

すすくすく永琳の薬のおかげで、巨大すすくすくは小さくなったが、それでも尚、ほかのすすくすくより二回りぐらい大きい。

おそらく、人をダメにするソファぐらいのサイズ。現にさとりさんがダメになってい

る。これでもかかってぐらい口元が緩んでいる。おそるべしすくすくナマズ。

俺も仕事が終わったらダメになろう。

### 3. 俺氏、お父さん気分。

週に一度のお休みの日の出来事。

暇を持て余していた俺が、ダメになりながら猫じやらし片手にすすく橙とすすくお隣の二匹と戯れていた時のこと。

「きゅー」「きゅー？」

「うわーっ!!? ちよ、やめてー! 襲わないでー!」

玄関が妙に騒がしい。

お休みの日にお客さんが来ることは珍しくないけど、今はもうカラスが鳴く夕暮れ時。

こんな時間に誰だろうかと思ひ玄関を開けると、すすく美鈴とすすくあうんがお客さんで遊んでいた。

「きゅーっ」ツンツン

「やめてやめてつつかないで！……あ、でもこれ気持ち良いかも」

短いモフモフの手で、頭にお腕を被ったお客さんの頬をつんつんするすくすくたち。

これはまた、ちっちゃいお客さんだ。

---

「少名針妙丸と申します。この度は助けていただきありがとうございます  
「きゅー」」

すくすく白沢の頭の上で深々とお辞儀をする、小人さん改めすくすくちゃん。



いろいろ話を聞いたところ、彼女は博麗神社からはるばる徒歩でやってきたらしい。霊夢さん経由で喫茶店の存在は知っており、一度来てみたかったのだとか。

「それはもう長い道のりでした……。猫に追われ、妖精に絡まれ、モフモフにつつかれ……たどり着いた時にはもうこんな時間になっていました。なのに今日は定休日だったなんて……。グスン……」

「きゅー」

「うう……。ありがとうモフモフ……。ずずーっ！」

すすすす針妙丸がすくなちゃんの涙を拭き、鼻をかんであげている。他のすすすすたちも励ますようにキューキュー鳴きながら寄り添っている。

すすすすは小さいけど、すくなちゃんもっと小さいからね。自分より小さいすくなちゃんに対して母性本能がすすすすにも働いているのだろう。

「ただいまー。つて、うわっ。女の子泣かせとる……」

あ、お帰りなさいばんきさん。

そして誤解です。待って待って遠ざからないで。

今日はもう遅いし、こんな時間に小人の女の子を一人で帰らせるわけにもいかないの  
で、すくなちゃんは喫茶店に泊めることにした。

何より、せつかく来てくれたのだから、ちゃんとおもてなしをしないとね。腕により  
をかけて料理を作ろう。すくなちゃんは小人だけど『私はたくさん食べる方です!』つ  
て満面の笑みで言っていたから、たくさん作るぞー。

「「「きゅー!」」」

すくすく咲夜とすくすく妖夢、すくすくアリスもやる気まんまん。頼もしい限りであ  
る。

珍しくすくすく美鈴も厨房にいる。よし、今日は中華中心にしようか。

ばんきさんも、お手伝いお願いします。

「うん。まかせて」

うん。まかせた。

「肉まん！ シューマイ！ かに玉！ どれもおいしいです！」

「おお……良い食べっぷりね」

「きゅー！」

ばんきさんは少し驚いた表情で、料理を食べるすくなちゃんを見守る。

確かに、その小さい身体のどこに入っていくのかってぐらい、すくなちゃんはもりも

り食べる。育ち盛りなのだろうか。たくさん食べて大きくなつてね。

それにしても、美味しそうな顔で食べるなあ。

おかわりいる？ 小籠包もあるよ。

「たへまふ！ ほれもおいひーれふ!!」

「口の回りが大変なことになつてる」フキフキ

「んんー……ありがとうございますろくろ首さん！」

「ばんきでいいよ」

すくなちゃん口の口の周りをばんきさんが拭く。

その様子はまるで親子。

……娘ができたならこんな感じなのかなあ。

「えへへ……。お二人とご飯を食べてると、なんだかお父さんお母さんと一緒にいるみたいですよ」

「ぶっ!？」

あ、ばんきさんが吹きだした。  
うわあー。顔真っ赤。

「針妙丸ー、迎えに来たわよー。つて、あら？」

後日、すくなちやんを迎えに霊夢さんがご来店。  
が、店内に入つてすぐ、霊夢さんは目を丸くして立ち止まってしまった。

「霊夢！いらつしやいませ！」

「きゅー！」

その理由は、霊夢さんを出迎えたのが、すすすくに乗り、小人用のエプロンを身に着けたすくなちゃんだったからだろう。

『一宿一飯の恩義！ 私もここで働かせて下さい！』

昨日の晩ごはん後、すくなちゃんにそうお願いされたのだ。

人手が増えるに越したことはないので二つ返事で承諾。すすすくアリスにすくなちゃんのエプロンを作ってもらい、さっそく今日からお仕事してもらうことに。

「これまた小さい店員さんだこと。ナナスケさん、針妙丸のことよろしくね」

「店長さん！ これからよろしくお願いしますす！」

「きゅー！」

うむ、よろしく。

これからまた賑やかになるなあ。

## 4. 俺氏、扱いの差が激しい。

すくなちゃんバイトを始めて数日。

「お待たせしましたー！　こちら、ショートケーキとなりますー！」

「きゅーー！」

「おおー。こんな小さいのに働きの偉いねえ。これ、あたいが上司からこつそりお借りしてきたキャラメルなんだけど、持っくいきなよ」

「貰つていいんですか！　やったー！」

「小人さん、私からどうぞ。咲夜さんからひつそりお借りしているキャンデーです。すくすくさんのもありますよー！」

「きゅーっ！」

「まあ…！　こんなにたくさん！　あとで美味しくいただきますねー！」

すくなちやんの人気がすごい。

もともと人懐っこい性格に加えて、何事にも一生懸命な娘だ。その見た目の愛らしさと相まって、お客さんの母性本能をことごとく刺激しているのだろう。

そして、すくなちやんは常にすすくの頭の上に乗っている。その方が移動が楽なのだ。すすくも上に乗られる分には構わない様子。

たまーにだけど、すすくが5匹ぐらい積みあがった状態でお昼寝していることもあるので、上に乗られるのは慣れてるのだろう。

そして小町さんと美鈴さん。

後でバレてもうちでは匿いませんからね。



「」

『きゅー？』ツンツン

同日の午後。

笏とナイフが頭に突き刺さった状態で床に大の字で倒れている2体の屍に、すすくが不思議そうな顔で群がっていたときである。

「こんにちはーナナスケさん。このお店はいつもスクープの香りがしますねえ」

文さんことパラッチさんがご来店。

お出口はあちらですよ。

「あややー……私の信頼も落ちたものですねえ……。しかし、今日は取材に来たわけではないので構いません。私の背中にいる方にご飯を出していただけませんか？」

「ぎゅーはん……」グウウウウウ……

よく見ると、緑色の帽子をかぶったツインテールの女の子が、お腹からすごい音を鳴

らしながら文さんにおんぶされている。

そういうことは早く言ってくださいな。  
今すぐフルコースをお出ししますから。

キュウリの浅漬け。

キュウリの酢の物。

キュウリのサラダ。

かつば巻き。

「ぶはあー！ いやあ、助かったよ盟友！ おかげで生き延びれたー！」

すべてを料理を平らげて復活したのは、かつぱっぱのにとりさん。無事で何よりで

す。死体が増えなくてよかった。

にとりさんが死にかけていたのは、飲まず食わずで5徹していたからなんだとか。理由は『納期がヤバかった』だって。お疲れ様です。たくさん癒されて行ってくださいね。

「きゅー」「きゅー?」「きゅー」

「いつも以上に辛い戦いだっただよ今回はー。すくすくー、私を癒してー」

「「きゅー!」「」」

「はあー……もふもふう……」

すくすく文、すくすくはたて、すくすく椀の3匹を抱き寄せて、頬ですくすくをすりすりするにとりさん。

「きゅー……!」

そんな様子を羨ましそうに見つめるすくすく阿求。

モフリたいのか、モフられたいのか。

たぶん、両方かな。

……あれ、向こうの席に文さんがいる。

まだ帰っていないかったのか。

ここからは聞こえないが、コーヒーを飲みつつ、メモ帳に何か書きながら、真面目な顔でブツブツと何かつぶやいている。

『小人が働く喫茶店！』……これではインパクトに欠けますね。『喫茶店店主、今度は小人と熱愛か！』……うん、こちらの方が良いです！あくまで『か！』なので嘘は書いていませんよね。ね。ね。いだだだだだ！』

「ヤメロ」

「きゅーー！」

あ、ばんきさんが文さんの頭にアイアンクローを喰らわせた。すすくすくばんきつきも文さんの顔をこれでもかかってぐらいボカボカと叩いている。

痛そうだけど、まあ文さんだし、いつか。

## 5. 俺氏、SNSを活用。

— GSッター —

@運営

> GSチャットに新機能『GSッター』を追加！  
> ここに書き込んだ眩きや画像は

> 不特定多数の皆が閲覧することができるよう！

@運営

> 適当にぼやくも良し、何かを宣伝するも良し！

> さあ！ みんな好きに眩いてみてね！

> ただし、過激な内容は御法度！ 節度は守ろう！

にとりさんは言っていた。「パクリじゃないもん！ インスパイアだもん！」って。

まさか幻想郷でSNSができる日が来るとは思ってた。流石はにとりさんが  
5 徹しただけある。

GSチャット同様、GSツイッターでも外の世界にいる人たちとコミュニケーションが取れるらしい。今まで何も疑わずに使ってきたけれど、すごい技術だなあ。

「きゅー」タップタップ

『きゅー？』『きゅー！』『きゅーー！』

GSツイッターはすすすすの間でも人気になっており、すすすす董子が絶賛やっている。他のすすすすたちも、すすすす董子のスマホを囲うように、画面を覗き込んだり、呟いたりしている。

でもすすすすたちは『きゅーー！』としか呟かない。唯一文字が書けるすすすす阿求でさえ『きゅーー！』。

まあ、本人たちは呟くたびに満足そうな顔してるし、すすすくの『きゅー!』にも色々な想いが込められているのは俺が一番良く知っている。疑問には思わないでおこう。

どれどれ。俺もちよつとのぞいてみよう。

—— GS ツター ——

@ちつちやい賢将

>またご主人が宝塔を無くしたなう

@プリンセスわかさぎ

>最近ばんきちちゃんの付き合いが悪いなあ

@ヴォルケイノ藤原

>ひまー

@ドラゴンみすず

>ここは暇つぶしに最適ですねえ

@片翼の天使

>おしごとつらたん

@すすく

>きゅー！（すすくたちの写真付き）

@モフリストAQN

>すすくさーん！

>今から行きますねー！

うむ。まんまアレだね。

何とは言わないけどさ。

さて、すすくたちよ。あんまりGSッターばかりやってちやいけないぞ。お客さんもいるし阿求さんも来る。さあ、お出向かえの準備だ。

『きゅーー！』



うん。良い返事。

「ナナスケナナスケ、良いこと思い付いたぞ！」

「きゅー！」

夕方。喫茶店閉店後の後片付け中に、右肩にすくなちやん、左肩にすくすく董子を乗せ、右手にすまーほを持ったころちやんが駆け寄ってきた。

良いこと？

「店長さん、GSツッターで喫茶店の宣伝をしましょう！ きつとたくさんお客さんが来てくれると思います！」

こころちやんの代わりにすくなちやんがそう答える。

なるほど、宣伝か。開店初期のころはいろいろやっていたけれど、軌道に乗ってからはやってないなあ。これは良い機会かもしれない。

幻想郷は狭いようで広い。口コミや文々。新聞では情報が届きにくい場所への宣伝としては大いにありだろう。

よし、やってみようか。

「ふはは！ そう言うと思って既に喫茶店用のアカウントを作っておいたぞ！ 『褒めて』の表情！」

「すすすすさんの写真もたっぷりです！ いっぱい宣伝しましょう！」

『きゅー！』

2人もすすすすもすごいやる気。

やはり女の子。こういうことが好きなんだろう。

そういうえば、すくなちゃんもすまーほ持つてるんだね。

「はい！ この前ようやく手に入れました！」

そうやって、すくなちゃんは小人用のものと思われる小さいすまーほを掲げる。

最近ってことは、あれもにとりさんの5徹に含まれているのだろう。ホントによく働くなあ……………。

「……………」

「……………はあ」

「……………おしごと、つらたん」

「……………なにか癒し、ないかな……………ん？」

「……………もふもふしてる……………かわゆい」

## 6. 稀神サグメは癒されたい。

最近、お仕事がとてもつらい。

仕事が難しくて大変、というわけではない。単純に仕事の量が多いのだ。やってもやっても書類の山が減らない。燃やしたい。

唯一の癒しは、仕事の合間にするGSッター。これはとても良い。普段、言葉を発せられない私にとって、これほど良いストレス発散手段はない。

そんなある日、GSッターで気になる眩きを見た。

@すくすく喫茶『モフモフ』

>今日から3日間スイーツが半額！ ぜひ来るがいい！

>すくすくさんも待つてますよー！（写真付き）

地上にある喫茶店についての眩き。

スイーツも魅力的だが、私が気になるのは『すくすくさん』と呼ばれる生物。

写真を見る限り、とてもモフモフしている。そしてとてもかわゆい。見てると胸が  
キュンキュンする。それぐらいかわゆい。

……もふもふしてみたい。

思い立ったが吉日、早速有休を取った。  
地上に降りるのは久しぶりだ。

「きゅー……zzzz」

ここが噂の喫茶店『モフモフ』。お店の前には、春の心地良い暖かさに負けたのか、2匹のモフモフが気持ちよさそうに眠っていた。

これがすすくさん………生で見るともつとモフモフだ。そしてかわゆい。

恐る恐るそーつとすすくさんを指で突いてみようとしたが、起こすと悪いのでやめておく。それに、喫茶店の中にはもつとたくさんすすくさんがあるはずなのだ。

胸に期待を込めて、私は喫茶店の中へと入る。

「きゅー?」「きゅー」「きゅー!」「きゅー!」

「きゅーっ」「きゅー!」「きゅー」

「むきゅー」「きゅー!」「きゅー」

その瞬間、大量のすくすくさんが身体中に飛びついてきた。

全身が、モフモフとした幸福で覆われたような感覚。

……………なごむ。

「きゅー!」



席に案内されてからも、すすすすくさんをモフモフし続ける私。

すすすすくさんが可愛すぎる。特に、お腹をモフモフしてあげた時の「きゅー！」の鳴き声がかたまらない。かわゆいを通り越してきやわたん。マジやばたにえん。

これは想像以上に癒される。

一生モフモフしてられる。

帰りたくない。

「横から失礼します！　こちら、ご注文のお料理です！」

幻想郷に移住しようかと思いかけたその時、小さな店員さんがすすすすくさんに料理を運んできてくれた。ありがとう……と言ってしまうと後で何が起こるかわからないので、ぺこりと一礼し、料理のお皿を受け取る。

せつかく来たのだから、料理も楽しまなければ。

注文したのはプリン。私の好物。

一口食べると、口の中で甘さがとろける。

実に美味。おかわりしようかな。

「プリン、お気に召して頂けましたか？ 今日からの新メニューなんですよ」

「きゅーー！」

夢中になって食べていると、頭の上に赤色のモフモフを乗せた、店主と思われる男に声をかけられた。

ほんのちよつぴりパーマかかった黒髪に、ポーカーフェイスをあまり崩さないミステリアスな雰囲気の人間。この者が、この癒しの空間を作った張本人。

……なんだろう。

見ていると、頬が熱くなる。

「きゅーっ!!」ボフォン

そう思った瞬間、私の顔に赤色のすくすくが体当たりしてきた。

モフモフだけど痛い。なぜゆえ。

でもかわゆいから許す。

「こらこらすくすくばんきつき。お客様に体当たりはダメだぞ」  
「きゅーっ……」

「次からは気をつけるようにな」モフモフ  
「きゅーっ！」

赤いすくすくを宥めるようにモフモフする店主。  
これはとても絵になる。写真撮っておこう。

……写真立て、家にあったかな。

## 7. 私、パルパル。

最近の私は、とても気分が良い。

理由は語るまでもない。ふへへ。

アイツとそういう関係になれたおかげで、寝てる時間とバイトしてる時間以外は、常に喫茶店に入り浸っていられるし、2人きりの時間も大幅に増えた。これほど幸せなことがあるだろうか。いやない。とても幸せ。

「ばんきちちゃん、いきなりデレデレになったねー」

「この前まではちよつとおちよくるだけで顔真っ赤だったのに」

姫と影狼が何か言っているが、気にしない。

なんつても言え。私はもう吹っ切れたのだ。

お前たちもアレだ。恋をすればこの気持ちかわかる。

「うわーっ！ ばんきちちゃんの口から『恋』って！ 似合わない！ 気持ち悪い！ 末永くお幸せに!!」パルパル  
「うわーっ！ 置いて行かれた感すごい！ 私も出会いが欲しい！ 結婚とかしてみたー！」パルパル

姫と影狼が嫉妬に狂っている。  
実に良い気分。

でも、まあ、その。け、結婚はまだ早いだろう。  
そりや、小人に『お母さんみたい!』って言われたときは恥ずかしかつたけど嬉しかったよ？ でも結婚は、うん。まだ早い。もっと交際を積むべきだろう。

私とトオルの関係はまだ始まったばかりなのだ。これから時間をかけて、その……愛を育んでいきたい。

……乙女か私は。

……乙女か私。

---

と、この前までは思ってた。

「きゅー！」

「……………」モグモグ

「お気に召してもらえて何よりです」

そう甘いことも思っていられないかもしれない。

最近、喫茶店に行くと銀髪片翼の女をよく見かける。

女の私から見てもとても奇麗な人。口は飾りと言わんばかりの寡黙かつポーカークフェイスだが、気持ちは羽に出ているっぽい。ケーキを一口食べるごとに羽をパタパタさせている。美味しいのだろう。

ここまでは良い。問題はその女がトオルに向ける、妙に熱っぽい視線だ。

経験談から言わせてもらうと、あれは以前、私がトオルに向けていたものと同じもの。つまりLOVEな視線。間違いない、女の直感が私に言っている。

そんな視線にアイツが気づくわけもなく、平然と接客を行っている。料理を美味しそうに食べてくれるのが嬉しいのか、ほんのり笑顔になっている。

……できれば、その顔は私だけに向けてほしい。ぱるぱる……。

「きゅー……」。パルパルパルパル

はっ。今、すごい嫉妬の念に駆られた気がする。

お前の仕業か黄色いモフモフめ。後でたくさんモフモフしてやる。

と、とにかく。私の彼氏に別の女が好意を寄せるのは、彼女としては良い気分ではない。

かといって、この公然の場でトオルとイチャコラしたり、『私の彼氏に色目使っんじゃないわよ!』と言えるほどの勇気は持ち合わせていない。

今はトオルを信じよう。

それで、今夜小人が寝たらイチャコラしよう。

……こ、今夜は寝かせないんだから!



## 8. 俺氏、いろいろ言われる。

—— GS ツター ——

@おつきーな

>部下二人が反抗期気味

>かなしい(・ω・)

@普通の魔法使い

>今日は本でも借りに行くかな

@ヴォルケイノ藤原

>ひまー

@にゃん☆にゃん

>新鮮な死体募集中☆

運営が にゃん☆にゃん さんの

アカウントを凍結しました！

@聖徳太子

>当然の結果だな

@すすく

>きゅー！（お昼寝中のすすくの写真付き）

@片翼の天使

>もももふかわゆい

@モフリストAQN

>片翼の天使さんとは

>おいしいお酒が飲めそうです！

---

GSツッターで宣伝を始めて数日。

「きゅー？」「きゅー」「きゅー！」

「きゅーっ」「きゅー！」「きゅー」

「むきゅー」「きゅー！」「きゅー」

「……………」モフモフ

不思議な雰囲気のお客さんが、うちの常連リストに加わった。

常に口元を片手で軽く覆い、俺やこころちゃんが親近感を覚えるぐらいのポーカーフェイス。どことなく気品を感じられるオーラ。そして銀色の片翼。

名前はサグメさん。訳あって喋れないらしく、常に携帯してるスケッチブックに書いて教えてくれた。

GSッターをやり始めたぐらいのタイミングで来てくれるようになったから、つまりそういうこと。しかも月からやってきてくれているらしい。SNSの力恐るべし。

「……………」モフモフ

「きゅー？」

身体の至る所にすくすく、がくつ付いた状態にも関わらず、無言ですくすく白沢ををモフリ続けているサグメさん。かれこれ数十分モフリ続けている。

「……………ふふっ」

「きゅー！」

時々微笑む横顔はとても美しい。すくすくも嬉しそうに、サグメさんの腕の中できゅーきゅー鳴いている。とても絵になるね。うん。

サグメさん以外にも、GSッターを見てやってきました！って人は多い。結果としては大満足。

だがしかし、良いことばかりではない。

「……………」パルパル

「きゅー……………」パルパル

GSッターを始めたころと同時期ぐらいから、ばんきさんの様子がおかしい。

なんと言うか……感情の起伏が妙に大きい。2人っきりの時はとても機嫌が良く、甘えてくることが多くなった。しかし、今はとてもパルパルしている。

その証拠に、すすすすパルスイを頭に乘せた状態で、服の上から俺の横っ腹をつねってくる。

痛い何故ホワイ。

ばんきさん、俺なにかしました？

「……………別に。……………今夜も寝かせん」ボソッ

「きゅー！」

そう言つて手を離し、ぷいっとソッポを向いてしまうばんきさん。ちよつと頬が膨らんでいる。

かわいいけれど、やっぱり不機嫌。  
最後ボソツと何を言ったのだろうか。

「ラブコメの波動を感じる、の表情。ナナスケ、いつか背後から刺されぬように注意するべし」

「店長さん！ 浮気はめっ！だよ！」

店員二人に何故か注意された。

俺は死ぬまでばんきさん一筋なんだけどなあ……。

「ナナスケさん。今思ったことを今夜就寝前に言つてあげると良いでしょう」

「言葉として口に出し、相手に伝えて初めて、愛は育まれるものです。モフモフさんもそう思いますよねー」

「きゅー！」

常連さん2人からアドバイス。

勉強になります。

同じテーブルに向かい合うように座る阿求さんとさとりさん。

2人はほぼ毎日と言っても過言ではないほどお店に来てくれているが、2人一緒にいるのは珍しい。

やっぱりモフモフ愛好家同士、話が合うんですね。

「それもあるんですが……実は私、モフモフソムリエになるため、さとりさんに勉強を教えてもらっているんです！」

「私としては、とても教え甲斐がありませんけれど」

「そんなこと言わないでください！ 試験は3日後！ 若輩者ながら、モフモフしつつ頑張らせていただきます！」

「きゅー！」

阿求さんはすすすくをモフモフする手を休ませることなく、さとりさんにモフモフソムリエのイロハについて教わっている。

モフモフソムリエって試験で取れるのか……。

応援してます阿求さん。

……ん？ 阿求さんがモフモフしてるすすく。  
もしかして、初めて見るすすくかも。

「きゅー！」

青い箱みたいな帽子をかぶった、薄い水色っぽいすすく。

すすく 慧音先生だ。

そう言えば今までいなかった。

「きゅー」「きゅー」

すすく 白沢とは別個体みたい。2匹は互いを確かめるようにモフモフしながら  
じゃれ合っている。かわゆい。



うーむ。当然のように増えたが、すすすすがどこから現れてくるのかは未だ謎のまま。

いつか解明される日が来るのだろうか。

## 9. 俺氏、祝う。

「……………私、ずっと我慢してました」

静かに、しかし力強く。

阿求さんは俯きながら、そう呟いた。

その日は朝から雨だった。豪雨と言っても過言ではないほどの雨風の中なのに、阿求さんは傘を差さずに喫茶店を訪れた。

「ずっと苦しかったんです……。貴方が、他の人と一緒にいると思うと……。キュッて、胸の奥を締め付けられるような……。そんな痛みが、止まらなかつた……」

阿求さんが一歩、また一歩近づいてくる事に、髪や着物から雨水が滴る。

普段とは180度違う雰囲気を纏う阿求さんを目の前に動揺し、心配の言葉すら喉から出てくることはなかった。

「でも……でも！ 私……もう限界なんです！ こんなことダメだって……頭ではわかってます！ けどっ……！」

溜まっていた苦しみを全て吐き出すように。

阿求さんは顔を上げて、真つすぐ、見つめる。

「お願いです……今日だけ、今この瞬間だけ……私を、貴方の一番にしてください……」

そう言って、阿求さんは震える身体で抱き着いた。

「すすくさんツ……!!」

すすく大ナマズに。

「きゆうー……」

びしょ濡れ阿求さんに抱き着かれ、何とも言えない表情をするすすく大ナマズ。

うむ。

いつもの阿求さんでした。

「ご迷惑おかけしましたナナスケさん……私ったら、嬉しさのあまり飛び出してきてしまいました」

「きゅー」  
「ごー」

すすすく咲夜にドライヤーで髪を乾かしてもらっている阿求さん。びっくりしましたよ、ホントに。

事情を聴いたところ、阿求さんがあなってしまったのは、『モフモフソムリエ』への最終試験が禁モフだったからとか。

『最後の試験は一日禁モフ。一度離れてこそ、モフモフの真価を理解できるのです。これ乗り越えれば貴女も私たち「モフモフソムリエ」の一員よ』

阿求さんにとって生き地獄のような最終試験を乗り越えた結果が冒頭である。いやー……阿求さんは本当にすすすすが好きなんだな……。

そして無事(?)、禁モフを乗り越え『モフモフソムリエ』に合格し、うちにやつてきてくれたのだ。めでたいことに違いはない。今日のお代はいりませんので、じゃんじゃん好きなもの頼んでくださいな。

「あの……阿求は、ここにいますか……？」

阿求さん来店からしばらくして、今度は鈴の髪飾りをつけた女の子が来店。いらつしやい小鈴ちゃん。なんだか疲れた顔してますね。

阿求さんならあちらの席で美味しそうにスイーツを食べながらすすくのフルコーズをモフモフしてますよ？

「はあ……モフモフう……あれ小鈴。私に何か用？」

「『何か用？』じゃないわよう！いきなり走って出て行って！身体壊すよ!？」

「すすくさんがいる限り、私は不滅です。ねー？」

「きゅー」

「……どうしてこうなっちゃったんだろう……」

すすくくにデレッツデレの阿求さんを見て、さらに顔色を悪くする小鈴ちゃん。気持ちはわからないでもない。俺だって、阿求さんが一年でここまで変わると思ってたなかったもの。すすくくは人生を変えるね。

とりあえず小鈴ちゃんも座つたら？ 体調が悪そうに見えるし、さつきから足元がともふらついている。髪もボサボサだし、よく見たら目の隈も酷い。大丈夫？

「大丈夫じゃないんですよ！ 禁モフだかなんだか知らないけど！ 阿求ったら昨日いきなり鈴ち奈庵ちに来たと思つたら、私にすすくさんの話を徹夜で語つてきて！ 一睡も許されることなく聴かされた私の身にもなつてよ、もう！」

「ごめん小鈴。ああでもないしと理性を保てそうになかつたから。そんな疲れ切つた小鈴におすすめなのは、マミゾウさんのすすく。疲労も吹き飛ぶモフモフ感よ！」

「きゅー！」

「………かわいいけども、モフモフだけでも………ちよつと仮眠させて………」

「きゅー！」

そう言い残して机に伏し、夢の中に旅立つた小鈴ちゃん。その頭の上にはすすくすくドレミーがちよこんと乗っていた。

うん。いい夢見させてあげてね。

毛布も持つてきてあげよう。



## 10. 俺氏、顔に出る。

— GSチャット —

@ ( 罪 )

&gt; 朗報だ親友

@ シン・ナナスケ

&gt; どしたし

@ ( 罪 )

&gt; 東方キヤノソボールの配信が開始した

&gt; スマホの中でゆかりんが俺に笑いかけてくれている

&gt; まさに夢のような現実。実に朗報だろう？

@ シン・ナナスケ

> ふーん

@ ( 罪 )

> 反応が薄いな

> 何時でも何処でもゆかりんと一緒なのだぞ？

> 今が人生の絶頂期と言っても過言ではない

@ シン・ナナスケ

> 過言だと思うぞ

@ ( 罪 )

> ああゆかりん

> 貴女ははどうして

> ゆかりんりん

@ シン・ナナスケ

> 末期かお前

---

「何も過言ではないわ。私と24時間一緒にいられるなんて幸せ以外の何物でもないでしょ、この朴念仁」

「きゅーっ!!」

スマホをポケットにしまった瞬間、スキマからヌルリと現れた紫さんとすすすすゆかりに叱られた。

運営相手には、俺とアイツの会話にプライバシーはないらしい。解せぬ。

紫さんが喫茶店に来るのはそう珍しいことじゃない。寧ろ、常連さんの中でもよく遊びに来る方だ。

が、いつもなら藍さんと橙ちゃんが一緒なのに、今日は珍しくお一人の様子。

正確にはお一人と一匹。

「きゅーー！」

すすすすくゆかり。

俺が幻想入りするより前に紫さんが発見し、そのまま八雲家の下で暮らしている黄色いモフモフ。今はすすすすく藍、すすすすくちえんと一緒に、互いをモフモフしながらじゃれ合っている。

すすすすくの間には本人たちのような上下関係はなさそう。みんな楽しそうに「きゅーっ！」とはしゃいでいる。

「今日もすすすすくさんは可愛いですねえ……」パシャパシャパシャヤー！

そんな様子をすまーほのカメラ機能を使って撮影している阿求さん。とても穏やかな顔をしているが、残像が見える速度ですまーほの画面をタッチしている。セルフ連射とは、阿求さんやりよる。

至福の時間の邪魔してはいけないので阿求さんはスルー。

紫さん、お料理をお持ちしましたよー。

「ありがとう。やっぱり3時のおやつはこれに限るわ♪」

紫さんお気に入りの料理はすすくアリス特製アップルパイの上にバニラアイスに乗せたもの。温かさと冷たさ、そして甘さがベストマッチした自信の一品である。

ルンルンと食べ進める紫さんだが、3日に一度のペースでこれを食べにきて大丈夫なのだろうか。アップルパイのバニラアイス乗せは確かに美味しいが、かなりの高カロリー料理でもある。食べ過ぎると太りますよ？

「……………ナナスケ、知らないようだから教えてあげる」

はい？

「美少女はね。太らないのよ」

……………。

「店長さんが見たことない表情してます！　ころさん、あれはどんな表情でしょう？」  
「あれは『……しよ、少女？』とか思ってる表情。ナナスケ、生きて帰ってくるべし」  
「きゅー……」

遠くで少名ちゃんところちゃんの会話が聞こえた瞬間、足元が崩れ落ちるような感覚が俺を襲う。

落ちる瞬間見えたのは、すくすくの『お達者でー……』と言いたげなしよぼん顔。

そして気がつけば、無数の瞳が俺を睨みつける不気味だが見慣れた空間に放り出されていた。

……次のアカウント名、何にしようかなあ。

## 11. 俺氏、モフリたい。

「き、きゅー……」 ツンツン

すすすくの短くも可愛いおててに突かれて、ふと目を覚ます。

重い瞼をこすりつつ、スマホを確認すると深夜2時。草木も眠る丑三つ時だと言うのに、何かあったのだろうか。

俺を起こしたすすすくは半霊を抱いてぶるぶると震えながら「きゅーつ……」と怯えるように鳴き、俺の腕にすり寄ってくる。

どうしたすすすく妖夢。こわい夢でも見た？

お兄さんに話してみなさい。

「き、きゅーつ」

なぬ、幽霊が出たって？

その抱いている半霊ではなく？

意外にも幽霊が苦手だと判明したすくすく妖夢に引つ張られるように、連れてこられたのはすくすくのたまり場。

たくさんすくすくと少名ちゃんがスヤスヤと眠っている中、その部屋の中心には確かに、赤色に淡く光る幽霊のようなものがいた。

「わおーん……zzzz」

半透明な身体を丸めて寝ていたのは、触れられないのが実に惜しいほどの毛並みをもったオオカミの幽霊。

……特に無害そうだし、怖がる必要はないのでは？

「きゅーっ……」



正体がわかってても、すすく妖夢は俺の腕から離れようとしな  
い。怖いものは怖いらしい。

仕方ないので、一緒に寝ることにしよう。

寝付くまでナデナデしてやるかね。もふもふ。

「あつはつはつは！ いやあー悪いねえ！ うちの組のもんが迷惑かけた！ ごめん  
！」

そんなことがあつた同日の昼。漆黒の翼を背負い、カウボーイハットを被つた女性が  
両手を合わせて謝りにやってきた。初めて見るお客さんである。

名前は早鬼さんと言うようで、勁牙組つてところの組長さんらしい。とても元気なお

姉さんである。

「ぐるる……（すみません組長！ 道に迷った挙句にこの店に入り込んだんすが、妙に居心地が良くてそのまま寝てしまいました……）」

「無事で何よりだが、謝る相手は私じゃないだろ？ ほら」

「あおーん！（すんませんでしたモフモフのアニキ！ すすくさんたちも！）」

『『きゅー！』』

言葉はわからないが、謝っている気持ちはよく伝わった。

まあ、うちとしても実害はありませんでしたし、すすく妖夢を含めたすすくたちも特に怒っていないようなので、気にしないでくださいいな。

「そうはいかん。部下の責任は上司の責任、落とし前はしつかりつけさせてもらいたい。というわけでナナスケ！ 私にできることがあったら何でも言ってくれ！」

そう言ってバーンと自分の胸を叩く早鬼さん。

な、なんでもだつて……!?

「わかつてますねナナスケさん。願うべきことは、たったの一つ」  
「そうです！ 私たちのためにも、お願いします！」

どこからともなく現れて、俺の両脇に立つて声をかけてくるモフモフソムリエの阿求さんとさとりさん。

一応俺もモフリリストの端くれ。2人が願わんとしていることは理解できる。そして俺も、それを一目見た瞬間から。心のどこかでそれを望んでいた。

というわけで早鬼さん。

只ならぬモフオーラを放つその翼をモフつてもいいでしょうか？

「おおっ！ 私の自慢の翼に目をつけるとはなかなかやるね！ じゃんじゃんモフレ！ ……つて言いたいところだが、そっちの2人はともかく、ナナスケはやめておいたほうがいいかもしれないな」

なぬっ、なんでもって言ったじゃないですか！

「なんでもとは言ったが……後でそつちの嬢さんが怖そうだからな。それでもいいなら存分にモフってくれ」

そつちと言われて早鬼さんが指さす方向を見ると、見慣れたろくろ首さんが一人、すくすくパルスイを頭に乗せてこつちを見ていた。

……ばんきさん。違うんですよこれは。目の前にモフモフしたものがあるとモフリたくなるのは、当たり前のことなんです。下心とかは全くないで「えいつ」ブツ!?  
俺がセリフを言い終える前に、ばんきさんが投げたすくすくが俺の顔面に直撃。モフモフのはずなのに、妙に硬かった気がする。痛い。

……あれ？ よく見たら、初めて見るすくすくじゃないかコレ？

「きゅー」

鹿のような角に、カメのような甲羅を背負った淡黄色のすくすく。硬かったのは甲羅の部分か。

「おおつ、吉弔かこれ？ はっはっは！ すくすくだと可愛げがあつていいじゃないか

！」

「きゅっ！」

「いたっ!？」

何故か早鬼さんにも体当たりをかます新すくすく。

元となった人物は早鬼さんの知り合いのようだが、すくすくの様子から察するに、あまり仲が良い相手ではなさそうだ。

「モフモフ……モフモフ……ほほう、これはなかなか……」

「モフモフ……モフウ……圧倒的至福つ……しあわせ……」

『きゅー！』モフモフ

頬を擦る俺と早鬼さんを他所に、モフモフな翼をこれでもかとモフるモフモフソムリエとすすすすくたち。

とても羨ましいが、俺は先にパルスイさんと化したばんきさんをどうにかせねば。どうしたものか……あつ、そうだ。

ばんきさんばんきさん。

「……なによ、私よりそっちの女の翼の方が良いんでしょ妬ましい。勝手にすればいいじゃない妬ましい。もっと私に構いなさいよ妬ましい」

週末、デートにいきましょう。

## 12. 私、デートの準備。

「週末、デートにいきましょう」

その瞬間、パルパルとした邪悪な感情が頭と一緒にポーンと吹き飛んだ感覚がした。

アイツと付き合い始めて数か月。一緒にいる時間やスキンシップはそこそこ増えた。にも拘わらず、実はデートと言うものをしたことはない。

イチャコラするときは喫茶店ですくすくたちと一緒にじゃれ合うのがほとんど。買出しにはいつも付き合ってるけど、あれはデートとは言わないだろう。手を繋ぐことはあっても、いわゆる『恋人繋ぎ』をしたのは、付き合い始めた直後の一回きりだった。キスなんてもつてのほか。……あ、えと、あれはノーカンだから。

一般的なカップルはどうかは知らないけど、それでも、私たちの関係性の進展はかなり遅いほうだと思う。

もちろん、それにはどうしようもないようなちゃんとした理由がある。

「ふんふん。それで、その理由って?」

「……………は、はずかしいから」

「はああーっ! ほんつっとうどうしようもない理由だわー! ないわー! ばんきつきないわー!!」

「きゅー!」ポフポフ

うっさい影狼。頭を叩くなモフモフ。

自分でもわかってるわいそんなこと。

時は夜9時。場所は人里のとある居酒屋。

私は草の根の連中と、私のすすくと一緒に飲んでいた。

今日の主催者は珍しく私。目的はもちろん、初デートについての相談である。



いやー……ね？ 今までの私って孤高を生きる妖怪だったわけでした。妖怪としてそれなりに長生きしてるけど、彼氏ができたのは生まれて初めてなわけでした。多少は吹っ切れたとは言え、どういいう距離感で接していいか未だにわからないわけでした。その結果、あまり仲が進展しないわけでした。

トオルはトオルで付き合う前と後で特に変わった様子はなし。いや、少し笑顔が増えたかな？ 私のおかげだと嬉しい。ふへへ。

「にやけてる場合じゃないよばんきちちゃん。それにしても、お互いに奥手なんだねえ」「きゅー」

「奥手すぎよ！ キスすらまだとかホントないわー！ てつきり夜のイチヤコラまで行つてると思ってたのに！ つまんねー!!」

そろそろ殴つていいかなコイツ。

影狼のテンションが何時にも増しておかしいのは、熱爛が10本目に突入したからである。お酒の場で相談したのは間違いだったかもと今更だが後悔。

で、だ。

後悔してでもこの二人にデートの相談をしたのには、ちゃんとした理由はある。こっちは本当に。

「……………せっかくのデートだし、その、オシャレとかしたいんだけどさ。最近の流行とか、よくわからなくて……………できたら教えてくれないかなあ、って」

せっかくの初デート。良い思い出に残せるように、できる限りのことをしたい。

今の関係性でも十分に幸せだが、欲を言えばもつと踏み込みたい。ただでさえ、夜雀だの片翼女だの、付き合っても尚アイツを狙う輩がいるのだ。正直、不安で仕方ない。そりゃあこの前「俺は死ぬまでばんきさん一筋ですから」って言われたときは、すすくで顔を隠すほど恥ずかしかつた嬉しかった。アイツの私への好意が本物だつて実感できたから。

でも、できれば、その好意を行動で示してほしいとか……………ギユってしてほしいって言うか……………チュツとしてほしいって言うか。本人の前じゃ恥ずかしくて口が裂けても言えないけれど。そういう私の気持ちをトオルに察してほしいと思うのは、私

の我儘なのだろうか。

とにかくだ。今回のデートは私とトオルの関係性を進展させられるチャンスでもある。

草の根に頼むのは癪だが、なりふり構ってはいられない。男心にグツとくるコーディネートをお教え願いたい。

「よしきたー！ 私たちに任せてばんきつきー！ 男心が理性を見失うぐらい飛びっきりのコーディネートに仕立て上げてあげるわ！」

「明日さっそくお買い物ね！ 私の美的センスを遺憾なく発揮する時が来たわ！」  
“ の名は伊達じゃないってところを見せてあげるねばんきちちゃん！”

そこはかかない不安は感じるが、持つべきものは友。ここは信じよう。

「きゅー」

ん？ どしたのモフモフの私。

もしかして、デートについて来たい？

……できれば、お留守番しててくれると嬉しいかなあ。

## 13. 俺たち、デート。

—— GS ツター ——

@ビクトリーナナスケ

> 急募・おすすめのデートスポット

@普通の魔法使い

> デートつてしたことないけど

> 天界はきれいな所だつてきいたことあるぜ

@はらぺこ亡霊

> デートはしたことないけれど

> うちの桜はとってもきれいよー

@動きたくない大図書館

> ほとんど外に出ないけれど

> 妖怪の山の畔にある山道はデートに向いてるって

> 本に書いてあったわ

@ ビクトリーナナスケ

> なるほど

> 参考にします

@ モフモフソムリエAQN

> がんばってくださいナナスケさん!!

@ すくすく

> きゅーっ!!

---

ついに、デート当日である。

人生初のデート。すでにドキドキである。

喫茶店は休店日。すくなちゃんとすくすくにお留守番を任せて、やってきたのは待ち合わせ場所である人里の出入り口。

待ち合わせ時間10分前にも関わらず、俺がやってきたときには、見慣れた顔のばんきさんの見慣れない姿がそこにあった。

白を基調としたワンピースの上に、花びらの模様がおしゃれな薄紅色のカーディガン。首のチョーカーには、俺が付けているネックレスと同じ、黄色く煌めく宝石でできたアクセサリーが付いている。

柄にもなく見惚れてしまった。

ドキドキがさらに加速する。あばばばば。

ポーつと立っている俺に気づいたのか、ばんきさんが小走りで俺の方に近づいてくる。

イカンイカン。平常心を取り戻せ俺。

しつかりしろ。今日は大切な初デートなんだぞ。

おはようばんきさん。

お待たせしましたか？

「……ううん、私も今来たところ」

ほんのり顔を紅く染めて、微笑みながらそう答えるばんきさんの姿に、胸がキュンとする。

うむ。

俺の彼女が可愛すぎる。

---

『ばんきつきー！ 30分前には待ち合わせ場所になきやだめだから！ そして「待たせちゃったかな？（イケボ）」「ううん、今来たところ♪（可愛く作った声）」ってやり取りをするのがラブラブデートへの第一歩よ！』



これは影狼のアドバイス。

30分どころか1時間前に来て待ってたけど、まずは第一歩成功。上々よ、私。

今日の私は一味どころか百味違う。

この日のために、紅魔館の大図書館まで行ってデートのイロハについて3人で勉強した。今日の私は孤高に生きる妖怪ではなく、恋に恋する一人の乙女。とにかく本気なのだ。

どれぐらい本気がって言うと、明日恥ずか死んでもいいように、遺書まで書くぐらい。モフモフの私にビリビリにされたけど。

ちよつとやさつとじゃ、今日の私は動じない。

ラブラブデート、やってやろうじゃないの！

そう心の中で硬く決意した瞬間

「その、今日のばんきさん。かわいいって言うか、綺麗って言うか、ええと……………とても

素敵です」

ピキツと、私の決意にヒビが入った。

……ややややややつやややややばい。

嬉しさのあまり発狂しそう。

『ばんきちちゃん！ 殿方はギャップに弱いのに！ 暗めの色がカッコいいと思ってるばんきちやんが、明るめの可愛い服装に身を包んだ時、ナナスケさんの胸はキュンキュンが止まらないはずよ！』

これは姫のアドバイス。服は人形遣いに頼んだらノリノリで作ってくれた。

胸がキュンキュンしてるかはわからないけど、いつもは働かないトオルの表情筋が目に見えて仕事をしている。こんなに照れた顔見るの初めてかも。私の彼氏が可愛すぎる。

めちやくちやににやけそうな顔を何とか抑え、あたかも当然のように、私はトオルの

腕に自分の腕を絡める。

『恋人繋ぎ？　ばんきつき、貴方はそれで本当に満足なの？』

『知らないのばんきちちゃん？　ラブラブカップルなら腕を組むぐらい常識だよ？』

『きゅー!!』

これは2人とすくすくのアドバイス。

本当にこれが常識がは知らないけど、もう疑うことはやめにした。でないとなぶん、マジで恥ずか死ぬ。

「……今日、とつても楽しみだったから。エスコートよろしくね。トオル」

ちよつと上目遣いをしながらそう言って、私はトオルの腕を軽く抱きしめる。

恥ずかしい。でも、幸せ。

俺たちがやってきたのは、妖怪の山の麓付近にある一本道の山道。文さんたち天狗の管轄のエリアであるが、一般の人に公開している珍しいエリアでもある。秋はキノコやタケノコが豊作なんだとか。

今は定期的に葉桜がきれいに咲いている。満開の桜もいいが、これはこれで風情があつて俺は好きである。

この山道をまっすぐ歩いていくと、にとりさんもお勧めするほど澄んだ水が流れる河原に到着する。お昼ご飯はそこでマットを敷いてお弁当を食べる予定だ。

河原につくまでは、ばんきさんとのんびりおしゃべりしながらのんびりと歩く。平然を装っているが、胸のドキドキが最高潮に達しようとしている。

今日のばんきさんはもう、ね。かわいすぎでやばい。

一挙手一投足が俺のツボを正確に連打してくる。

「ねえ。トオル」

「どうしましたばんきさん？」

「……えへへ、なんでもない」

ほらね。かわいい。

少しでも気を緩めると抱きしめなくなる衝動に負けてしまう。抑えろ俺。流石にまだそういうのは早い。

たわいもない会話をしながら歩くこと数十分。河原に到着した。

下見にも来たけれど、何度見ても絵になる場所だ。良いデートスポットを教えてください

てありがとうございます。動きたくない大図書館パチユリーさん。

少し歩き疲れたのもあるので、さっそくマットを敷いて二人で座り込む。

ふむ。デートもそうだけど、こうやってばんきさんと2人だけになるのって、意外に初めてなんだよな。

いつもなら遊んでほしそうに「きゅー！」って寄ってくるすくすくがいるから心穏やかにになれるけど、2人きりだとホントに良い意味で心臓に悪い。幸せなドキドキってや

つだ。

でもたぶん。ばんきさんもすごいドキドキしてる。

抱き着かかっている腕からすごい鼓動を感じるし。

今日は2人だけでデートって約束だったけど、こういう時、すすすすくがいたら少しは和らぐんだけどなあ。

「きゅー」

そうそう、こんな感じに。

……………ん？

「トオル。あそこ」

俺の幻聴ではないらしく、ばんきさんも気づいたようだ。

「きゅー」

一匹のすくすくが石を積み上げて遊んでいる。

近づいて抱っこすると、毛並みはモフモフだが耳はモチモチしている。モフモチである。

「……きゅー？」

私、何かやっちゃいました？って感じに鳴くすくすく。

えーっと、ばんきさん。

2人きりのデートって約束でしたけど、この子も一緒にいいですかね？

「…当たり前。モフモフがいてこそその私たちだから。ねっ？ いっしょに遊んであげよ？」

「きゅーっ！」

そう言って、ばんきさんは俺の抱いているすくすくを優しくナデナデする。

うん。

俺の彼女がばんきさんでよかったです。



## 14. 俺たち、恥ずか死。

ばんきさんとのデートから翌日。今日は喫茶店の通常営業日だ。さあ、気持ちを切り替えていこう。

え？ お昼以降のデートはどうなったかって？ そりやあもう、ラブラブでモフモフなデートをしましたよ。初デートとしては大成功。楽しかったよなーすすくすく。

「きゅーっ!!」

河原で見つけたすすくすくえいかも嬉しそうに「また行きたい!」と鳴いている。うん、俺も。

「よっすー。今日も働きにきたぞー」

開店時間の15分前、カランコロンと入り口の扉が開くと同時に、こころちゃんの声が聞こえた。

彼女は不定期のバイトだが、最近は毎日来てくれている。ここのところお客さんも多いし、とてもありがたい。

おはようこころちゃん。

今日もがんばろう。

「おっはー、ナナスケ。ゆうべはおたのしみだったらしいな」

ちよつと待ってこころちゃん。

誰から教わったのそのセリフ。青娥さん？ 青娥さんなの？

こころちゃんからのいきなりの爆弾発言に流石に動揺する俺。すくなちゃんは「おたのしみ？……あつ！ デートのことかあ！」と納得したようにうなずいている。ああ純粋。

「ん？ 今日の新聞に書いてあったぞ。ほらコレ」

そう言われて手渡されたのは、今日付け発刊の文々。新聞。見出しは『必見！ 喫茶店店主の彼女だけに見せる笑顔！』

……………おっおう。

ザワザワ ザワザワ

「いやあ、読みましたさとりさん？ この新聞もといラブコメ小説」モフモフ  
「もちろん。地底でも話題になっているほどですから」モフモフ

「見かけによらずやるねえ店主さん。よつ、色男！」

「へえー、ナナスケ先生もこんな笑顔できるんだなあー。へえー」ニヤニヤ

「いいなあ……私もナナスケとこんなデートしたいなあ……」

「今日彼女さんは来ないのかい？ 君は笑うことが少ないからね。新聞の笑顔、ぜひ生で見てみたい」

ザワザワ ザワザワ

穴があつたら入りたい。

来店した全てのお客さんが新聞を片手に持っている。話を聞く限り、今日の朝一、号外として人里中に巻かれたようだ。ホントにもう、恥ずかしいつたらありやしない。

どこで見たたのか知らないが、新聞には昨日のデートのことが、文さんの脚色パパラッチをふんだんに交えた内容で書かれていた。

そんな新聞を読んで、生温かい目で俺を見るお客さんたち。

やめて、そんな目で俺を見ないで。

「きゅー」「きゅー?」「き、きゅー!」

「むきゅ」「きゅー!」「きゅー!」

「きゅー…」「きゅー!」「きゅーっ」

すすすくたちも新聞を読んで、各々違った反応を見せている。没収したいが、たぶん今更だろう。

唯一の救いは、ばんきさんが来ていないこと。

新聞の内容が内容だしな。きっと今日は来ないだろう。

そう思ってた時期が、俺にもありました。

「ささっ、ばんきちちゃん。入った入った」

「ちよ、何で押すのよ二人とも」

「何言ってるのばんきつき。主役が一番に入らないでどうするのよ」

草の根の方に無理やり連れて来られるように、ばんきさんが来店してしまった。

ザワザワ ザワザワ

「おおっ！ 主役がそろったぜ！ ほら行ってこいナナスケ！」

「一見クールそうに見えるけど、彼氏の前ではきつとあんな顔やこんな顔になるのねえ」  
「こんな新聞が広まつてるのに、何も知らないような顔で訪れにくるなんて。どこまでバカップルなのよ妬ましい」

「恥ずかしがる素振りすら一つも無しとは。まあ、こんな甘々デートを日常茶飯事（文の脚色）でしてるぐらいなら当然なのかのう」

「ナナスケ、ラブラブするのは構わないけれど、するならばラックコーヒーを無料提供しなさい」

ザワザワ ザワザワ

「……………え？ なに？ なんでもつちや見られてるの私？」

何故自分が注目的になつてゐるのか、いまいちわかつていない様子のばんきさん。

「ニヤニヤ」

「ニヤニヤ」

その後ろで、ニヤニヤを口に出しながらニヤついている草の根のお二方。

……………なるほど。あの二人、わざとか。

「きゅー！」

「ん？ どしたの私のモフモフ。 ……なにこれ、今日の新聞？ そういえば今日うちには届かなかつたのよね。どれどれ……………」

五分後、生温かい目線を背中に浴びつつも、真つ赤に染まった顔を両腕で隠しながら、机にうつ伏す2人の男女がそこにいた。

というか、俺とばんきさんだった。

『きゅーっ……』 ナデナデ

励ますように、俺とばんきさんの頭をなでるすくすくたち。  
気持ちは嬉しいが、今はそつとしてほしいなあ……。



## 15. 俺氏、実家を思う。

\*—————\*

「きゆう……」

「ナ、ナナスケ……しかとその目に焼き付けろ……これが私の『かき氷食べたい』の表情だ……」

「きゆうっ！」

季節の移り変わりは、歳を重ねるほど早く感じるものである。

昨日まで春だったと思っていたら、気が付けば夏になっていた。すすすくラルバが元気よく店内を飛び回っている。

代わりにその他のすすすくところちゃんも夏の暑さに負けて、たれたパンダの如く溶けている。そろそろクーラーの準備をするべきか。

「はあ……ふわふわでひんやり……気持ちいいなあ……」

「きゅー！」

こんな季節に人気なのは、やつぱりすすくすくチルノ。その上ですすくなちゃんがつ伏せで身体を埋めて<sup>うず</sup>いる。二人とも、お客さんが少ないとはいえ、だらけ過ぎはよくないぞ。

そういえばすすくすくチルノ、少し日焼けした？

白色の部分がこんがり茶色っぽくなってるけども。

「きゅー？」

どうやら自覚はないようだ。

まあ健康に害はないみたいだしいいか。

かき氷機はどこにしまったかなあと考えながら、阿求さんが注文したわらび餅を運ぼうとしたタイミングで、バターン！と勢いよく入口の扉が開かれる。

「暗いわ暗いわ！ そんな顔じゃあハッピーは訪れないわよー！」

「圧倒的低気圧。これは盛り上げざるおえない」

「プリズムリバー三姉妹、ただいまゲリラコンサート開催中ですよー！」

おおつ。誰かと思えば幽霊楽団じゃないですか。

今日は雷鼓さんがウイズってないんですね。

「雷鼓さんは女子二楽坊のヘルプに行ってるの。ごめんなさいねー」

「パーカッション担当は幻想郷において需要が高い。あの人は引つ張りだこ」

「私もできなくはないけど、雷鼓さんには適わなかなあ。でもご安心を！ 私たちは

もともと三人組！ しっかり盛り上がらせるわ！」

『うおおーっ!!』

『きゅー!!』

突然の幽霊楽団乱入に大いに盛り上がるお客さんたちとすくすく。妹紅さんなんか何処から取り出したのか、自家製法被はっぴを身に着け、両手にペンライトを持っておられる。

ガチ勢や…。

\*  
—  
\*

幽霊楽団のゲリラライブは珍しいことではない。月に一回ぐらいの頻度でやってきてくれる。彼女たちとすすくすりバーによる六重奏をBGMに食べるスイーツは別格だと、お客さんからも好評なのだ。

「きゅー♪」「きゅー！」

「きゅー！」「きゅーっ」

演奏に合わせて歌ったり、短い手足としっぽをフリフリしながら踊ったりすすくすく達。その可愛らしさにノックアウトされるお客さんも少なくない。阿求さん大丈夫ですかー？

「……ただいま。今日は一段のにぎやかなのね。ちよつと暑苦しい」

おつ。おかえりなさいばんきさん。

今日はお早いお帰りですね。アイスコーヒーどうぞ。

「ありがとう。すくな、ちよつとこのモフモフ借りるね」

「きゅー?」

「ああつ。私のひんやりがー……」

「仕事しろよ」

やはり外も暑かったのか、すくすくチルノに乗っていたすくなちゃんを持ち上げ、代わりに自分の頭を置くばんきさん。

「ふいー……生き返るー……」

気持ちよさそうに目を細めるばんきさん。

なかなかシユールな光景だけど、それでもかわいいと思えてしまう俺は重症だろう

か。まあ暑いときは首元を冷やすと良いって言うし、ばんきさんの行動は理にかなって  
いる……よな？

「やつほー店主さんにろくろ首さん！ ちゃんと盛り上がってるー？ ハッピーかなー  
？」

おやメルランさん。盛り上がってますよー。

今は休憩中ですか？ よろしければお飲み物をサービスしますよ。

「本当!? じゃあアイスコーヒー三つ！ ルナサ姉さんはブラックでー、リリカはシ  
ロップ多めでー、私のはフロートで！」

「メル姉ずるい！ 私もフロートがいい！」

「私もフロートを所望。少し熱くなり過ぎた」

「ルナ姉、ダイエツト中じやなかった？」

「……明日からかんばる」

「それがんばらないやつよルナサ姉さん！」

ワイワイがやがや騒がしく言い合う三姉妹。

さすが騒霊。コーヒーフロート三人分、お持ちしますね。

しかしこの三姉妹は仲が良い。俺にも文字通り姉弟きょうだいがいるけど、最近会ってないし元気にしているだろうか。

そもそも幻想郷に来て一度も実家に帰っていない。紫さんに頼んで、久しぶりに顔を出してみようかな。

ばんきさんも来ます？

「うえっ!? そ、それはちよつと。まだ、早いかな……心の準備が……ごによごによ……」

「呼んだかろくろ首」

「あんたじゃない！」

「こころちゃんにそう言うと、ばんきさんはすすすすくちルノに赤くなつた顔をポスつと埋める。かわいいね。」

「ぎゅー」

「おおつ。初めて見るすすくすくだ。店主さん、この子新入り？」

ばんきさんの行動に胸キュンしていると、リリカさんにそう声を掛けられた。

振り向くと、そこには俺も見たことないすすくすくがリリカさんに抱きかかえられていた。

「きゅー」

何とも形容しがたい、不思議な色をしたすすくすく。

いったい誰のすすくすくだろう。皆さん知ってます？

「うーん……わかんない。けど、なんて言うのかな」

「……この子を見てると、不思議と懐かしい気持ちになる」

「ねー。もしかして、私たちの演奏を聴きに来たの？」

「きゅーっ」

元氣よく返事をするすすくすく。



やりましたねお三方。お客さんが増えましたよ。  
休憩後も良い演奏、期待してますね。

「まっかせて！」

「もち」

「ハッピーに飛ばしていくわ！」

「「きゅー!!!」」

気合を入れる三姉妹とすくすくりバー三姉妹。

結局、三姉妹はこのすくすくの元となった人物を思い出すことはできなかつた。『懐かしいけどわからない』というのが三人の出した結論だつた。

しかし、このタイミングで現れたということは、三姉妹と縁のある方が元になっているのは間違いないだろう。

わからないなら直接聞くべし。

すくすくよ。君と三姉妹の関係は？

「きゅー！」

ほう。三姉妹はお姉ちゃん的存在とな。

……実はプリズムリバー四姉妹なのか？

今は亡き妹的な。いやいやいや。流石にないか。

## 16. 俺氏、パンを買う。

—— GS ツター ——

@いまいずみん

&gt;暑いわー

&gt;夏暑いわー

@ばんきつき

&gt;何で今日バイトを入れちゃったの私のほかー…

@普通の魔法使い

&gt;こういう日は涼しいところで冷たいものに限るぜ

@ヴォルケイノ藤原

&gt;あつー

@オータムな姉

&gt;秋はどこ……ここ……？

@オータムな妹

>まだ初夏よおねえちゃん……

@すすすす

>きゅー！（店先で水浴びするすすすくの写真付き）

@モフモフソムリエAQN

>暑い時こそすすすすさんをモフリに行くべきですよ！

>あつ……でも今日……お店お休み……ガクツ

@鈴奈庵公式アカウント

>阿求ー、生きてるー？

「きゅー」「きゅー！」「きゅーっ」

店先で打ち水を始めると、すすすくたちが自ら水を浴びようと走ってくる今日この頃。

いやー、今日から夏本番だね。昨日のうちにクーラーの準備をしておいて正解だっ

た。やっぱり喫茶店は涼しくなきゃいけないよね。

ギンギラギンにさりげなく照らしてくる太陽と青空を、すすすすゆうかりんと一緒に育てた立派な向日葵が仰いでいる。これぞ夏って感じた。

ちなみに今日の喫茶店は休業日であるが、別件でお客様がやってくる予定がある。

「ごきげんよう店主さん。花の手入れも欠かしていないようね、殊勝な心がけだね」  
「おはようナナスケ！ わあ、すっごく大きなひまわり！ 私よりも大きいわ！」

噂をすればなんとやらと思いつつ、声のした方向を振り返る。

純白の日傘をさしてやってきたのは、黄色いバンドナと花柄の刺繍が入ったエプロンを身に着けた幽香さんと、おそろいのミニエプロンを着たメデイちゃん。

おはようございますお二方、お暑い中ご足労頂きありがとうございます。  
ささっ。涼しい店内へどうぞ。

---

幽香さんはお客さんとして喫茶店に来ることも多いが、パンを売りに訪れてくれるこ

ともある。

なんでも最近パン作りにハマったようで、ベーカリーを始めたんだとか。自前の窯とかも家にあるらしい。とても本格的である。

「今日持ってきたのはバケットにクロワッサン、後は食パンね。どれも良い焼き加減に仕上がっているわ。そちらの小人さんにすすすく、一口いかが？」

『ぎゅー！』 mgmg

「ふあああ……！ この食パン、ふわふわのモチモチ……！」

「こっちのクロワッサンは私も作るのを手伝ったのよ！ 食べてみて！」

『サクサクふわふわ美味』の表情！

味も見ての通りだ。すすすくたちもすすすくなちゃんも幸せそうな顔でパンを頬張っている。あのこころちゃんできえ、ほのかに口元がにやけている。風見ベーカリー恐るべし。

人里でも出店を出しているようだが、すぐに行列ができて売り切れてしまうほどの大人気っぷり。そんな風見ベーカリーとタイアップできるのは、ひとえに幽香さんの気まぐれのおかげだろう。

つてことで、今日もある分全部買わせてもらってもいいですかね？

「もちろんよ。そのつもりで持ってきたもの。お得意様だし、少し安くしておくわ」

「まいどありー！」

「きゅー！」

お金を払い、パンの入ったバスケットをそのまま受け取る。

買ったパンはそのままランチとしてお客さんに出しているわけではなく、サンドイッチにしたりフレンチトーストにしたり、ひと手間加えてから提供している。クロワッサンは我が家の朝食用だ。

そうだ。今日はこれから新メニュー試食会をしようと思ってるのですが、一緒に食べていきませんか？ お代はもちろん頂きませんよ。

「あら、そういうことならご馳走になろうかしら。しっかり品定めしてあげる」

「ナナスケ、ゴチになるわ！」

「この時を待っていたぞナナスケ！ お腹ペコペコの表情！」

そう、お休みなのにこころちゃんがいるのはそういうことなのだ。この食いしん坊さんめ。

よし、さっそく調理に取り掛かろう。

すすすす達よ。幽香さんたちへの対応をよろしくたのむぞ。

\*  
—————  
\*

調理と言っても、今回は大したことはしない。

食パンの耳を切り、たつぶりの生クリームとマスカットを挟むだけの、簡単なフルーツサンドだ。

簡単とはいえ侮るなかれ。これがとても美味しいのだ。断面図はSNS映えするし、喫茶店とメニューとしては文句の付け所のない一品に仕上がっている……と俺は思っている。

しかしエビデンスは大事だからね。

みんなにも食べてもらい、感想をもらおう。

「きゅー？」



「あー……面倒な奴がいるタイミングで来ちまったな」

「本当よ。まさかアンタがいるとは思ってなかったわ幽香」

「あらまあ辛辣ね。昔は一緒に異変を解決するほど仲良しだったじゃない」

「そんな記憶は一切ないぜ」

「あんたが一番和を乱してたでしょーが」

料理を持って戻ってくると、何やら人が増えている。

霊夢さんに魔理沙さんじゃないですか。

本日は休業日ですよ。

「そう言うなってナナスケ。今日は涼しいところで冷たいものが食べたい気分なんだ。安心しろ、金は払う」

「きゅー」

「私はツケの支払いと、針妙丸の顔を見に来たのよ。迷惑かけてない？」

「もー霊夢！ 私を子供扱いしないでよー！」

「きゅーー！」

すくなちゃんが好きで、白沢の上でびよんぴよん跳び跳ねる。うーん、子どもだ。そして各々方の事情は理解した。まあ、たまには賑やかな休日も悪くないだろう。ばんきさんがいないのだけは残念だけど、バイトなら仕方ない。

ではお二人も食べて感想をくださいな。

マスカットのフルーツサンドです。パンの耳で塩ラスクも作ってみたので、こちらもどうぞ。

「もぐ……へえ、辛口のコメントを考えていたのだけれど、存外悪くないじゃない」

「爽やかな甘さでとってもおいしいわ！」

「『まいうー』の表情」

「クリームがあんまり甘くない分、フルーツの甘さが引き立ってるのね。今度の宴会に持ってきてもらおうかしら」

「パン耳ラスクも良い感じに塩味が効いてて美味しいな。これは止まらん」サクサク

「きゅー」サクサク

よっし。みんなからの感想も重畳だ。唯一何も語らなかつたすくなちゃんは、目を輝

かせながらハムスターのようにフルーツサンドを頬張っている。ちよつと大きかったかな。

ともあれ、これならメニューに載せても問題なさそうだね。塩ラスクも魔理沙さんとすすすくの食べっぷりを見る限り、採用の価値ありだ。

……むっ。よく見たらそのすすすく、初めてみる子だ。

「きゅー」

紺色を基調にした帽子に、先端が三日月の形をした杖を持つ緑色のすすすく。

魔法使いっぽいけれど、魔理沙さんの同業者かな？

「うおおおっ！ 魅魔様！ すくすく魅魔様だ！ 久しぶりだぜ魅魔様ー！」

「まあ、見ない間に随分と可愛くなったじゃない魅魔。撫でてあげましょうか？」

「ダメだ幽香！ お前に魅魔様はモフらせない！ しばらくはわたしの魅魔様だ！ ほらー！ こっちのフルーツサンドも美味しいぜ魅魔様！」

「きゅー」

おおう。魔理沙さんが年相応の少女の如くはしゃいでおられる。

その割にすすくはマイペースそうだけれど。

しかし、みまさまとはいったいどちら様で？

「魅魔は魔理沙のお師匠さんよ。今は魔界にいるんだっけ？」

「多分な！ 音信不通がデフォな人だけど、きつと元気にしてるぜ！ なっ魅魔様！」

「きゅー？」

すすくみまさま「そうなの？」って言うてるけど……。

いやまあ、魔理沙さんがそう言うならそうなのかもしれない。

「私も魅魔とは随分顔を合わせてないわね。久しぶりに戦<sup>や</sup>り合いたいものだわ」

「ゆうかもそのみまつて人を知ってるの？」

「ええ。霊夢がまだ亀に乗って空を飛んでいた頃、4人で仲良く異変解決をしたわ」

「だからそんな記憶はないぜ」

「アンタらは自分勝手に暴れてただけでしょーが……ってあれ？ 私のフルーツサンドがなくなってる!?! そこに食べかけ置いておいたのに!」

「あら、あれ霊夢のだったの。もういらないうのかと思ってあげちゃったわ」

「ちよ!?! 幽香ア!!」

お祓い棒片手に幽香さんに詰め寄る霊夢さん。仲良しなのは良いことですが、弾幕ごっこは外でやってくださいねー。

しかし、幻想郷の亀は空を飛ぶのか。知らなんだ。

\*—————\*

「……ふーん。なかなか美味しいじゃないか。しかしまあ、相変わらず賑やかな奴らだったね」

「きゅー?」

「おや、見つかつちまつたか。まあ見なかったことにしておくれよ、亀のすくすく」

「きゅー!」

\*

\*

## 17. 俺氏、なんとなくわかる。

至る所で蝉が鳴き、外の気温が30度を超える真夏のある日。

「きゅー！」

こども暑い日が続くと、お店の外でマスクットと化しているすくすくめーりんとすくすくあうんはしんどいかなと思つて様子を見に来たのだが、2匹とも全然元氣そうだ。

しかし、水分補給はちゃんとすること。

暑かつたら無理しないで、店内に入つてくるんだぞ。

「きゅー！」

そう言い聞かせて3匹の頭を撫でる。

うむ、暑くても心地よいモフモフ感。たまらんね。

ところで、一匹増えてない？

「きゅー！」

千万両と書かれた小判を持った三毛猫つぽいすすく。  
招き猫ならぬ招きすすく。

コイツは縁起が良い。後で猫まんまを作つてあげよう。

「……………」モフモフモフモフモフモフ

「きゅー?」

「…………トオルトオル、アイツは一体何してるの?」

本日のオススメ『黒蜜きなこあんみつ』をテーブルに置いたタイミングで、ばんきさんが俺の耳元でヒソヒソと聞いてくる。

ばんきさんの視線の先には、一言も喋ることなく両目を閉じて集中しながら、一心にすすくミケをモフリ尽くすモフモフソムリエ阿求さんの姿。

ああ、あれはですね。すすくを極限までモフモフすることで、すすくの神髄につ



いて調べているんですよ。

「……ごめん。ちよつと意味わかんない」

安心してください。俺もよくわかってないです。

阿求さん曰く、すすすすくミケの元となった人物は『お金かお客を招き入れる程度の能力』を持つているようで。

これがなかなか難儀な能力みたいで、お金かお客のどちらかを招き入れるともう一方を遠ざけてしまうという飲食店で扱うには致命的な能力らしい。

「ですのー！ お店に悪影響を及ぼさないか調べるために、精一杯モフモフさせていただきます！」と阿求さんに言われたのが事の始まり。

モフればわかるのか：阿求さんも人間やめてきたなあ…。

まあ俺としては何の心配もしていない。現時点で、すすすすくとはいえ疫病神と貧乏神が居座っているが、うちの経済面に支障はない。一匹ぐらい特殊な能力を持ったすすくくがやってきたところで何の問題もないだろう。

で、阿求さん。

結果はどうですか？

「はい、全く問題ありません！ たくさんモフモフしてしまいごめんなさいすすくさん。少し窮屈でしたよね」

「きゅーっ！」

「えっ？ 気持ちよかったからもつとモフモフしてほしい？ ああもうすすくさんは本当にもうっ！ もうっ!!」モフモフ

とろけるような笑顔で、再びすすくミケをモフリだす阿求さん。

ついにすすくすと意思疎通できるようになっておられる。モフモフソムリエになっても、阿求さんの進化は留まることを知らないようだ。

「トオルもすすくの言葉がわかるんだよね。どういう風にわかるものなの？」

阿求さんの行く末を少しだけ心配する俺に、ばんきさんがそう聞いてくる。

「どういふ風といわれても……なんとなくわかるんですよ。」

「きゅーっ！」

例えば、今のすすくすく橙は『新しい猫友だ!』って遊びたそうに言ってますし。

「きゅーっ！」

今のはすすくすくめいりんが『喉かわいたー!』って言ってます。

「きゅーっ！」

今の鳴き声は『初めましてー!』って言ってますね。

ん？ 初めまして？

「きゅー」

鳴き声の正体は、お団子へアが特徴的な黄色のすくすく。首元には埴輪のような装飾を付けている。

名前はすくすくまゆみって言うそうです。

礼儀正しいすくすくみたいです。

「私には全部同じ聞こえる……って言ったら、すくすくに失礼かな」

「きゅー？」

「ん、今のすくすくの私はなんて言ったの？」

今のは……えーつと……他の人に聞かれるとちよつと恥ずかしい程度のことを言いましたよ。

「ちよ!! ホントになんて言ったの!! おい私、何を言った!」

「きゅー……」

すくすくばんきつきの両頬をムニムニとこねくり回しながら尋問をするばんきさん。その隙にそそくさと厨房に戻る俺。

ふむ、『次のデートはいつするのー?』か……。  
夏っぽいデートプランを考えておこう。